

## 医療維新

シリーズ 「医学部卒業10-15年目の医師たち」～JCHO編～



### 3児の母は支えられて研鑽継続

年齢重ね、さらに広がるチャレンジ意欲を大切に -テーマ3「女性医師」 Vol.2-

オピニオン 2018年8月17日 (金)配信 JCHO大阪病院 消化器内科担当部長 兼 健康管理センター長 千葉三保

千葉三保 Miho Chiba

JCHO大阪病院 消化器内科担当部長 兼 健康管理センター長

【略歴】大阪府出身。2002年福島県立医科大学医学部卒業。大阪厚生年金病院（現JCHO大阪病院）内科研修を経て消化器内科に所属し、現在に至る。2018年4月から健康管理センター長兼任。

【所属学会・取得資格等】日本消化器病学会専門医・近畿支部評議員。日本肝臓学会専門医。日本超音波医学会専門医。日本消化器内視鏡学会専門医。日本内科学会認定医。日本人間ドック学会所属。



私は大阪駅からJR環状線で1駅、大阪市福島区にあるJCHO大阪病院に勤務しています。2015年5月、病床数はそのままに（565床）、免震構造と最新鋭医療機器（IMRTとハイブリッド手術室）を備えた新病院に生まれ変わりました。地域の基幹病院として急性期疾患から様々な慢性疾患まで各科が協力して診療を進めています。消化器内科は総勢18名。内視鏡総件数は年間約1万件と増加傾向にあります。特に、早期胃癌・大腸癌・食道癌に対するESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）を積極的に施行しており、2017年度は300件超のESDが行われています。その他、ウイルス性慢性肝炎に対するDAAs（直接作用型抗ウイルス剤）を用いたIFN-free治療、肝癌に対するRFA（ラジオ波焼灼術）、肝硬変に対する栄養療法など、幅広い消化器内科疾患を最新の知見と技術で診療しています。

私は研修医の頃からこの病院に勤務させていただいています。この間、結婚、3人の子どもの妊娠、出産という大きなライフイベントがありました。子育てをしながら病院勤務する女性医師の一つの働き方としてご覧いただければと思います。

新臨床研修医制度導入前の2002年当時、内科研修医2人の同期と一緒に、消化器、内分泌、呼吸器、腎臓内科・麻酔科研修をさせていただきながら、週末には月3～4回の24時間内科当直や救急当直をしていました。2003年春に消化器内科レジデントへ。朝から内視鏡室へはりついては2人の同期医師と競うように内視鏡をしていました。毎日のように深夜まで病棟に残り、他科のレジデント同士で入院担当患者の治療方針を相談し、たまった書類を書き、時には同期たちと夕食を出前して一緒に食べました。当時は紙カルテとX線フィルムの時代。処置やカンファレンスがある度に、重たい紙カルテとフィルムを担いで病棟を往復していたのを懐かしく思い出します。ある日、大学時代の友人と久しぶりに会ったときのこと、2人分の食事が目の前に運ばれてきたと同時に緊急内視鏡の呼び出しがあり、友人に謝って病院に駆けつけるようなこともありました。この頃は病院と家の往復だけの毎日でしたが、忙しくも大変充実した日々を過ごしていました。

当時脳外科レジデントであった主人とは、救急外来で頭部CT読影を依頼したときに初めて話しました。共通の入院患者さんを受け持つ中で意気投合、その彼と医師となって5年目の2006年に結婚、2007年に1人目の子どもを出産しました。当院では2004年から清野佳紀先生（前院長）のもと、院内保育園、病児保育室、短時間正職員制度など子育て支援制度が整備されていました。このような安心して働ける制度があり、長女は院内保育園へ通園させていただくことができ、出産後8カ月間で復帰ができました。復帰後すぐ、できていたつもの仕事は上級医のサポートがなかったので、自分がトレーニング半ばであったことを思い知りました。そして、これまでのように消化器内科の醍醐味である緊急処置や重症患者の受け持ちと、家庭の両立が難しいことに気が付いたのです。1年くらいでしょうか、慢性期の病院へ異動した方がいいのかとか、消化器内科チームの中で何ができるのかを自問自答する日々が続きました。

たどり着いたのは、消化器内科の専門的知識を深めよう、チームの診療サポートをしよう、今できる手技から磨いていこうという思いでした。それから、すきま時間を見つけては、専門医受験を目指し、レポート作成、文献検索、勉強を続けました。そうした時間を持つことで焦燥感が自然となくなっていました。

#### 1人目出産後に3学会の専門医取得

出産後8カ月で復帰して1年くらい悩んだ後、2年くらいの間に3学会の専門医を取得できました。2人目の育休復帰後（医師10年目）には造影腹部超音波検査の担当をさせていただき、本腰を入れて腹部超音波に関する勉強を始めました。内藤雅文先生（市立吹田市民病院副院長、前消化器内科担当部長）のご指導のもと、学会発表を積極的に行い、超音

波専門医を取得できたのは消化器内科医として大きな自信になりました。3人目の育休復帰後（医師15年目）は地方会での座長を経験させていただきましたし、今春からは健診担当という仕事にも挑戦させていただくことでまた新たな目標ができました。消化器内科はスタッフ、レジデントの複数で入院患者さんを担当する態勢ですので、検査入院や緊急入院などの症例もレジデントを指導しながら経験できています。



ナビゲーション下造影超音波検査の様子

現在の勤務形態は、子どもを小学校へ送り出してからの出勤を希望し、午前9時（30分間の時間短縮）から始業で、当直と時間外勤務を免除していただいています。時間内勤務中は、消化器内科医として造影腹部超音波検査やRFA、上下部内視鏡検査や外来を行うとともに、人間ドックでの診察や結果判定、関係各部門との連絡や文書管理などのマネージメントをしています。

家庭でのサポート状況、子どもの年齢、希望するワークライフバランスなどさまざまな状況により、個人が必要とする子育て支援制度は変わりますし、支援制度をフルに利用されていない子育て中の女性医師もいらっしゃいます。多様な働き方で女性医師が多く活躍されているのは心強い環境です。これまで消化器内科でも支援制度を利用しながら子育てをしている女性医師が多くいましたので、子どもの急な発熱の際には代診をし合うなど助け合って診療を進めてきました。

研修医の頃から叱咤激励してくださる山崎芳郎院長をはじめ、無理のないペース配分で新しい分野に挑戦させてくださる伊藤敏文副院長兼消化器内科部長、入院担当、当直、オンコール、外来診療等でご支援を賜った多くの先生方へ、この文面をお借りして感謝申し上げます。

家庭では平日には母が、週末には夫が子育てや家事をサポートしてくれます。それでも3人の子育てはボリュームがあり、どうか日常生活を回している感じです。仕事と家庭の両立にはサポートが不可欠です。家族へも感謝の毎日です。

私は医師である父への憧れがあり、5歳くらいの時には医師になりたいと思っていました。10歳の時、祖父が心筋梗塞で亡くなりました。祖父は、家に遊びに行くと決まって子どもには大きすぎるボールみたいなおにぎりを握ってくれました。寡黙な祖父でしたが、大きな愛情を感じていました。祖父と最後に会った日に限って、いつものように手を握ってきちんと挨拶をせずに別れてしまったことが、子ども心に後悔の念として残りました。祖父との突然の別れが、医師になりたいという思いをより強くしました。

レジデントの頃、当直をしていると、自分が入院担当をしていた患者さんが心肺蘇生をされながら搬送されてきました。レスピレーターに乗せ、診察を進めていくと肝臓破裂による出血性ショックであることが判明、緊急で肝動脈塞栓術が施行されました。そして一時は意識が戻るまで回復しました。その方は、しばらくして肝不全で亡くなったのですが、意識が回復された間にお孫さんたちが代わるがわる病室を訪れて会話をされている姿を見ました。自分の祖父と重なり、ご家族の皆さんと最後の時間を穏やかに過ごされているのをお手伝いできたと感じ、心に残っています。

#### 女性ならではの心遣いを必要としている患者さんがいる

「女の先生で良かった」「先生に会ったら安心する」と、患者さんから声をかけていただくことが仕事の励みになります。女性ならではの細やかな心遣いを必要としている患者さんは確実にいます。男性医師と同様に、女性医師にも大学病院、基幹病院、総合病院、健診センター、地域医療、子育てや介護をしながらの非常勤勤務、研究分野など、多様な施設・勤務形態で活躍されている方がいらっしゃいます。医師には多様な立場での働き方があることを知り、自らの将来像をできるだけ具体的に想像することが、特に女性医師には大事ではないでしょうか。

さらに、出産・子育てを考えている女性医師は出産前に救急や重症患者を積極的に受け持ち、後輩医師へ指導できる技術や経験をできるだけ多く積んでおくことが重要であると考えます。経験した症例は一覧表を作っておくこともレポート作成時に役に立つと思います。また、勤務形態が変わっても、常に明確な目標を見つけることで医師として働くモチベーションを保つことができると思います。子育て支援制度があるだけでなく、実際にそれを利用できる職場の雰囲気も大事ですので、そのような施設が増えることを期待したいです。

#### 最近一番楽しいのは…！

外来を始めて15年。最近、レジデントの頃から担当している患者さんが「先生、昔はお嬢さんやったのにな」「お互い、歳とりましたなあ」と話されました。こんな会話を交わしながら診療できるのが一番楽しい時間です。この施設で長く勤務できたからこそ、人生の先輩である患者さんから教わることも多く、また、長期間の経過、転帰を経験することができました。スペシャリティとして消化器内科疾患を診療していきながら、健康管理センター部門を発展させていくことが現在の目標です。

10年、20年先の医師像はまだ思い描けていません。自身が年齢を重ねることで「予防医学」に、子どもがかかりつきの先生に度々お世話になることで「地域医療」に、担癌患者の担当をする中で「緩和ケア・訪問診療」に、という具合で、さまざまな医療の重要性をますます感じる今日この頃です。医師は幅広い分野で求められていますし、年齢を重ねてからでも新しいことにチャレンジしやすいと考えると楽しい気分になれます。自身の可能性を狭めずに、自分が必要とされる分野があればどんどんチャレンジして、研鑽を積んでいきたいと思います。

---

シリーズ [「医学部卒後10-15年目の医師たち」～JCHO編～](#) »